

報告2

国保京丹波町病院

理学療法士主任

森本勝則

診療放射線技師主任

山内敏行

【第1日目】瀬戸内市立瀬戸内市民病院

まず、竹内院長、加藤看護局長、事務局幹部の方々より施設概要の説明をいただき、京都府国診協からあらかじめ提出されていた質疑に対する回答をいただいた。その後、全員1グループとなり院内を案内していただいた。その後、岡山県国民健康保険団体連合会の担当者より、看護師確保対策事業について紹介をしていただいた。

■新病院開院までの経緯■

瀬戸内市民病院は、岡山県南東部の医療圏に位置している。この医療圏には2つの大病院や日赤、済生会病院などの大規模病院が多く、高度急性期の病床が過剰となっており、半面、回復期の病床が不足している。また、瀬戸内市内には、同病院以外に精神科及び療養病床をもつ病院が1施設あるのみで、一般

病床を有する初期救急を担う病院は同病院のみとの実情がある。

このような状況の中、地域医療構想に沿った形で一般急性期医療の機能を維持しつつ、今ある急性期病床の何床かを回復期病床へ転換し、地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みを充実させていくことを考えておられる。

同病院の新改革プランにおいても、「地域医療構想を踏まえた当院の果たすべき役割」として▽一

般急性期
医療の実
施▽初期
救急▽リ
ハビリ機
能を活か
した在宅
復帰支援
▽軽度認
知症患者
(合併



瀬戸内市民病院

症)への対応▽家庭医の支援と在宅療養支援(訪問看護)▽岡山県重症心身障害児(者)レスパイト事業への協力▽地域医療従事者等の養成—の実施をうたっておられる。

国保京丹波町病院(以下、当院と略す)においても同様の状況があり、かつ、病院の規模としても比較的近いいため、地域における病院の役割やその中での自部署の必要とされる方向性など、今回の視察研修では、当院の状況に重ね合わせることができ、参考となることが多々あった。

■院内の見学■

院内の見学では、2階建ての1階部分に外来、検査、放射線、手術室、救急の各部門が集約され、外来部門や放射線科では各部屋が裏側ではつながっており、職員が自由に行き来できる機能的な造りとなっていた。2階は3つの病棟とリハビリテーション部門が配置されていた。病棟と同じ階にリハビリスペースが必要という竹内院長の考えが反映されているとのことだった。また、病棟の4人部屋の2部屋に一カ所の割合でトイレが設置され

ており（個室はトイレあり）、トイレの設置場所がとても多く、入院患者様にとってはうれしい環境であると感じた。そして、病棟廊下は幅が広く、長さも直線で50m以上あり、歩行速度の測定にも使用されていた。日常的に、患者様が車イスや歩行練習をされているとのことであった。

病棟は、一般病床64床（看護基準10：1）、地域包括ケア病床16床、回復期リハ病棟30床を運営されている。新病院開設に合わせて地域包括ケア病床を11床から16床へ増床。また回復期リハビリテーション病棟を開設されたとのことだった。これは、地域医療構想を踏まえ、同病院が地域の医療ニーズに応え、地域包括ケアを実践されている証であると感じた。リハビリテーション部門としては、理学療法士8名、作業療法士4名、言語聴覚士2名のスタッフで運営されていた。この職員数で、外来リハビリと入院リハビリの対応をされ、特に、地域包括ケア病床16床、回復期リハ病棟30床の運営には、かなりの労力を割いておられるものと推察された。見学させていただ

いた時間は16時頃であったが、まだリハビリ室には多数の患者様がおられ、直接リハビリ部門の方と話す機会がもてず、実際の運営方法や課題などのお話を聞かせていただくことができなかった。廊下からはリハビリ室の中が良く見えるようにガラス張りにな



ス張りにな

たことは残念であった。廊下からはリハビリ室の中が良く見えるようにガラス張りにな

ており、オープンな空間の中で訓練が行われていた。リハビリ機器も充実されており、岡山県では2台しか導入されていないADLシミュレーターや天井から吊り下げる歩行訓練用リフトなどが導入されていた。

■放射線部門

放射線部門は現在診療放射線技師3名で、一般撮影・CT撮影・ポータブル撮影・MRI撮影・TV透視・受付業務をこなしており、本年11月からはマンモグラフィも行われ

る予定であるとのことだった。

特に放射線で印象的だったのがMRI装置II写真⑤IIを導入された後も技師数の増加がなく、各自の役割分担を適切に行わなければ診察に影響がでてしまい、各自が今何をすれば良いかを考えながら業務を行うようになったことや、技師数が増加されないで夜間のオンコール体制を無くし、医師に撮影業務を任さざるを得ない状況であり、技師が撮影できない悔しさ等が当院と同じ境遇であり考えさせられた。



また一般撮影室からCT撮影室に直接移動ができるように鉛扉1枚だけで仕切られていたり、MRI

I室入口に磁性体センサー（マグファイ）を設置し、診療放射線技師が行う磁性体侵入確

認の手助けになったりと、技師の立場にたった施設構造で、業務の効率化を考えてあると感じた。

同病院は、本年10月末に病院機能評価の更
新審査を受けられる予定とのことで、大変お
忙しい時期であったにも関わらず、研修を受
け入れていただき丁寧に対応していただいた。
結果、予定時間より1時間を超えるものとな
った。同病院の熱心な活動に触れ、自分たち
も地域に根ざした医療を実践していく思いを
強くした。

【第2日目】岡山県女子バレーボールチーム
の岡山シーガルズコーチ・中田聖子氏の講演
「選手の能力を引き出すコーチング」

バレーボールのトップカテゴリーでプレー
をする選手は、小学生のころからバレーを始
めている選手が多い中、岡山シーガルズでは、
中学や高校からバレーを始めた選手も多い。
そのようなスタートが遅い選手でも、トップ
カテゴリーでやっていける力を身につけるこ
とができてるのが監督の指導法によるとこ
ろが大きい。

そのため、まず岡山シーガルズの監督であ
る河本昭義氏の考え方が紹介された。

監督は、「考える心のバレー」を考え実践さ
れている。「考えるバレー」とは、「もつと早



く」「もつと高
く」と言っても
選手はうまくで
きない。高く飛
ぶためにはジャ
ンプ前のしゃが
み込みや足の使
い方をどうする
かなど、その選
手に合わせたわ

かりやすい指導をされている。その選手の特
性を見極め活かしながら、水泳や野球などを
練習に取り込まれている。練習の中では、一
つ一つの動きを選手に質問し、確認していく
作業を行っている。またレギュラー以外の選
手にも、監督が直接ボールを打つなど関わり
を持つことで選手のモチベーションも高まっ
ている。

「心のバレー」というと根性論をイメージ
しやすいが、自分がつらくなった時でも、自
分のことだけでなく、周りがんばっている
人たちのことを考えられるようにという意味
だそうである。

今回の話では、そういった関わりや各人に
合わせたきめ細かな指導により、選手は監督
を信頼し、信頼する監督の下で自分を信じて
努力することで成長できている。それがモチ
ベーションを維持することにつながり、シー
ガルズのような一企業に属さない市民参加型
のクラブチームでもトップカテゴリーで好成
績を残せ、日本代表選手も4名輩出できるチ
ームとなったとの話をいただいた。

医療職にあってもチーム医療や協働が必要
なのは言うまでもないが、周囲の人たちのこ
とを考え、職員・患者を問わずその人にあっ
た対応を心掛けることが大切であるというこ
とを改めて認識できた講義であった。最後に、
本研修に関わっていただいた全ての方々に深
く感謝いたします。